

2025 年 2 月

# 食料安全保障月報 (第 44 号)



令和 7 年 2 月 28 日

**農林水産省**

# 食料安全保障月報について

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供を目的で作成しています。

## 2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

# 2025年2月食料安全保障月報（第44号）

## 目次

### 概要編

I	2025年2月の主な動き	1
II	2025年2月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2024/25年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2024/25年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「フィリピンの主要穀物の生産・輸入動向」	5

### （資料）

1-1～3	穀物等の主要輸出国の生産量（過去10年平均との増減比較）	10
1-4	穀物等の国際価格の動向	13
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	14
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	15
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	17
5	食品小売価格の動向	21
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）	22
7	FAO食料価格指数	24

### 今月のコラム

「タイの食事情（コメ料理）について」	25
--------------------	----

### 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
<米国>	2024/25年度の生産量は前年度から9.3%増加の見込み	
<カナダ>	2025/26年度の作付面積は前年度から2.5%増加の見込み(AAFC)	
<豪州>	2024/25年度の小麦の収穫は完了し生産量は31.9百万トンの見込み(ABARES)	
<EU27>	2024/25年度の輸出量は前年度から減少し25.7百万トンの見込み(EC)	
<ロシア>	2024/25年度の輸出量は前月から下方修正され45.5百万トンの見込み	
<ウクライナ>	2024/25年度の輸出量は前月から下方修正され15.5百万トンの見込み	
<中国>	2024/25年度の輸入量は前月から下方修正され8.0百万トンの見込み	

2	とうもろこし	9
	＜米国＞	2024/25年度の生産量は史上最高の前年度から3.1%減少する見込み
	＜ブラジル＞	2024/25年度の生産量は前年度から3.3%増加する見込み
	＜アルゼンチン＞	2024/25年度の生産量は、前年度並みの見込み
	＜ウクライナ＞	2024/25年度の生産量は、前年度より18.5%減少する見込み
	＜中国＞	2024/25年度の生産量は、前年度から2.1%増加する見込み
3	コメ	15
	＜タイ＞	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み
	＜米国＞	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.9%増加する見込み
	＜中国＞	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み
	＜インド＞	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ5.2%増加する見込み
	＜ベトナム＞	2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.8%増加する見込み
II	油糧種子	
	大豆	21
	＜米国＞	2024/25年度の生産量は前年度から4.9%増加する見込み
	＜ブラジル＞	2024/25年度の生産量は前年度から10.5%増加する見込み
	＜カナダ＞	2024/25年度の生産量は前年度から8.4%増加する見込み (AAFC)
	＜中国＞	2024/25年度の生産量は、史上最高の前年度から0.9%減少する見込み
	＜アルゼンチン＞	2024/25年度の生産量は、前年度から1.6%増加する見込み
	(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25年度)	27
	(参考2) 単位換算表	27
	(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	28

## 特別分析トピック

「我が国と世界のでん粉をめぐる動向」

### 【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル マットグロッソ州カンポス・デ・ジューリオ市の大豆畑。収穫作業は2025年1月23日に行われた。当圃場の大豆は4.38トン/ヘクタールと高単収を記録。(マットグロッソ州2025年1月23日) 撮影者：Rafael Rohenkohl氏

(概要編)

## I 2025年2月の主な動き

### 主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2024/25年度の作況について、北半球での収穫がほぼ終了した一方、南半球では大豆等の作物が生育期を迎えている。

2024/25年度の状況について、品目別にみると、2月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシア、英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、インドで単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、中国、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022年3月に史上最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4者合意（黒海穀物イニシアティブ）については2023年7月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、中国、南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加、ブラジルで収穫面積が増加するものの、米国で収穫面積が減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、EU、ロシアで単収が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に砂糖、植物油、食肉の価格の低下等により、12月の127.0から、2025年1月（最新値）は124.9に下落（参考：2024年1月117.6、2023年1月131.4、2022年1月135.7、2021年1月113.5、2020年1月102.5）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の約5割の水準で推移。

### 早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021年7月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2025年2月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



## ウクライナの生産・輸出動向

USDAの2月需給報告によれば、2024/25年度の小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの単収が減少することから、前年度より0.4%減少し2,290万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より18%減少し2,650万トンとなる見込み。2024/25年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より17%減少し1,550万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より25%減少し2,200万トンとなる見込み。

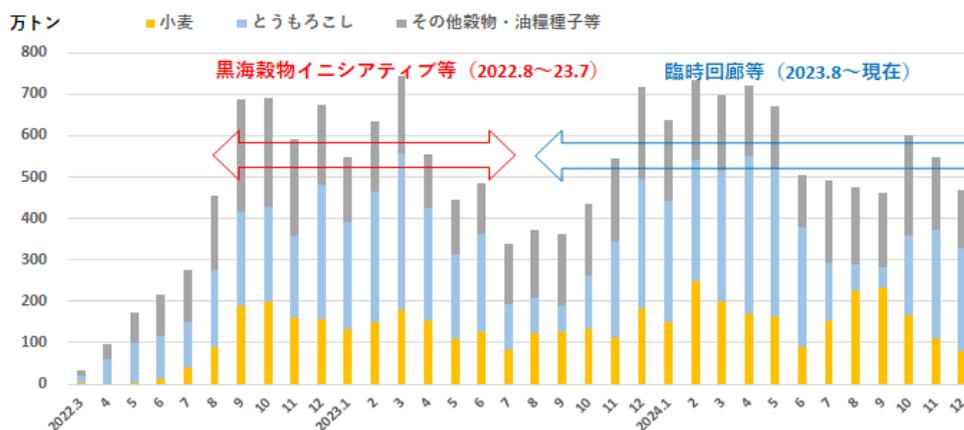
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25年度の小麦及びとうもろこしの収穫作業は終了した。また、2025/26年度の冬小麦の作付作業も終了している。ウクライナ気象センターによれば、12月に引き続き1月も例年より温暖な天候となった。冬小麦は浅い休眠状態にあり、日中の気温が8度以上の日にはわずかな生長がみられた。しかし、降水量不足の状態が長期間続いており、土壌水分量は非常に少ない状態。これは冬小麦だけでなく、春に作付けされるとうもろこし等の作付けにも影響を及ぼす懸念がある。

## 臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ピブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022年8月～23年7月）は、穀物・油糧種子等6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

### （参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年12月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

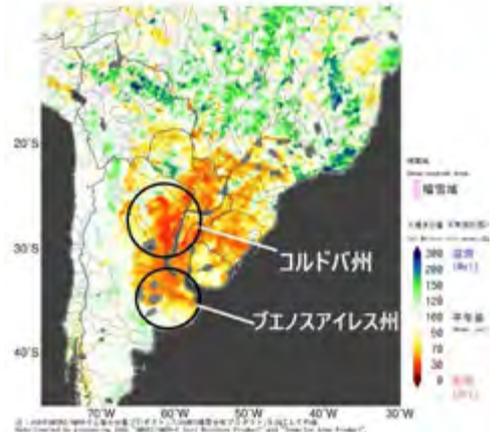
注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

### 1 アルゼンチン：1月の高温乾燥により大豆及びとうもろこしの作柄が悪化

USDAによれば、2024/25年度のアルゼンチン大豆生産量は4,900万トンと、前月予測から6%下方修正されたものの、前年度から2%増加する見込み。前月からの下方修正の要因は、アルゼンチン大豆の約75%を占める早植え大豆が開花期を迎える1月に高温乾燥が続く、作柄が悪化したことによる。

2024/25年度のとうもろこし生産量は5,000万トンと、前月予測から2%下方修正され、前年度と同水準となる見込み。昨年、遅植えとうもろこしに病害虫のヨコバイが大量発生し、作柄が悪化した一方、早植えとうもろこしは被害を免れたことから、今年度は多くの農家が例年より多くの早植えとうもろこしを作付けしたところ、早植えとうもろこしが受粉期を迎える1月に高温乾燥となり、大豆同様に作柄が悪化した。

図：アルゼンチン土壤水分量(平年対差)  
(2025. 1. 1~1. 15)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMA1)

### 2 ブラジル：大豆の生産量は前月から変更なしも、とうもろこしは下方修正

USDAによれば、2024/25年度ブラジルの大豆生産量は1億6,900万トンと、前月予測から変更なく、前年度から10%増加し、過去5年平均を18%上回り史上最高の見込み。ブラジルの大豆生産の約44%を占める中西部の大部分で生育期を通じて天候に恵まれ、作柄は良好となった。現在、収穫作業が始まっており、2月7日時点の収穫進捗率は15.1%と、平年(18.4%)をわずかに下回っている。

2024/25年度のとうもろこし生産量は1億2,600万トンと、前月予測から1%下方修正されたものの、前年度から3%増加し、過去5年平均を12%上回る見込み。同国のとうもろこしの約76%を占める冬とうもろこしは、大豆収穫後の1月以降に作付けされる。例年、大豆の作付作業は雨季が始まる9月上旬から開始されるが、今期は雨季の開始が遅れ、大豆の作付作業が遅れが生じた。このため収穫時期も例年より遅れ、冬とうもろこしの作付作業にも遅れが生じている。雨季は通常4月下旬までに終了し、その後は厳しい乾季となる。冬とうもろこしが受粉期を迎える時期に乾季となった場合、作柄が悪化する懸念がある。

### 3 アルゼンチン：輸出税の引き下げ等により小麦輸出が好調

USDAによれば、アルゼンチンの2024/25年度(2024年12月~2025年11月)の小麦輸出は好調なスタートを切り、今年度の小麦の輸出量は前年度比40%増の1,150万トンとなる見込み。輸出を牽引する主な要因は、2022/23年度の干ばつによる減産から生産量は継続的に回復し、2024/25年度生産量は前年度比約12%増の1,770万トンとなったことや、政府の政策がより有利になることを期待し、農家が十分な小麦在庫を保有していたことによる。2025年1月27日、アルゼンチン政府は2025年6月30日までの期限付きで主要品目の輸出税を引き下げた。小麦の輸出税は12.0%から9.5%に引き下げられ、小麦輸出をさらに下支えしている。

南半球の小麦生産国であるアルゼンチンは、北半球の多くの小麦輸出国が供給量を減少させる時期に世界市場に小麦を供給する。アルゼンチン小麦の伝統的な輸出先国はブラジルだが、アルゼンチンの港湾データによれば、アルゼンチンはここ数か月、アフリカ大陸全域で市場シェアを拡大している。また、南アジアや東南アジアにも輸出を増加させている。

## II 2025年2月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1月末、200ドル/トン台前半で推移。2月に入り、米国の対メキシコ関税措置の延期により報復関税に伴う米国産の需要低下懸念が和らいだことや黒海地域の冬小麦の作柄に対する懸念等を受けて210ドル/トン台半ばまで上昇。その後、米国や黒海地域の冬小麦の作柄に対する懸念が和らいだこと等を受けて210ドル/トン台前半まで下落したものの、再び米国及びロシアの寒波の影響懸念から上昇し、2月中旬現在、220ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1月末、180ドル/トン台後半で推移。2月に入り、米国の対メキシコ関税の延期により報復関税に伴う米国産の需要低下懸念が和らいだこと等を受けて190ドル/トン台半ばまで上昇。その後、アルゼンチンの降雨等を受けて190ドル/トン台前半まで下落したものの、アルゼンチンの高温乾燥等を受けて上昇し、2月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

コメは、1月末、480ドル/トン台前半で推移。2月に入り、タイのバーツ安やアジアからの需要低迷、アフリカにおけるインド産米等との競合を受けて下落し、2月中旬現在、440ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1月末、380ドル/トン台前半で推移。2月に入り、米国の対中関税の導入に対し中国が大豆への報復関税を実施せず米国産の需要低下懸念が和らいだこと等を受けて390ドル/トン台半ばまで上昇した。その後、アルゼンチンの降雨、ブラジルの豊作見通し等を受けて370ドル/トン台後半まで下落したものの、アルゼンチンの高温乾燥等を受けて上昇し、2月中旬現在、380ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

## III 2024/25年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.04%減の28.19億トン。消費量は、前年度より1.3%増の28.56億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.5%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前年度より、小麦、コメで増加も、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少となり、28.19億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.56億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、4.93億トンの見込み。

期末在庫量は、7.56億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は2月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2024/25年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.78億トン。消費量は前年度を上回り6.66億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る21.0%となる見込み。

(注：数値は2月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による)

## V 今月の注目情報：フィリピンの主要穀物の生産・輸入動向

人口増加と経済成長が続いているフィリピンでは、小麦のほぼ全量を輸入に依存しており、その輸入量も近年増加傾向にある。同様に小麦の大半を輸入に依存する日本との競合の可能性についてまとめた。また、フィリピンはコメの輸入国でもあり、生産量が減少する中で、人口増加により需要が増加しているフィリピンにおける2024/25年度のコメの輸入見通しをまとめた。

注：文中の「2024/25年度」等は市場年度で、フィリピン的小麦及びコメは2024年7月から2025年6月。

### 1 小麦の輸入動向

#### (1) 消費動向

USDAによれば、2024/25年度の小麦の消費量は、710万トンと前年度に比べ2.2%増、過去10年平均（614万トン）と比べ15.7%増となる見込み（図1）。

国連食糧農業機関（FAO）の Food Balance Sheet によれば、フィリピンの一人当たりの小麦年間消費量は、25 kg/人（2002年）から44 kg/人（2022年）と増加している。

フィリピン製粉企業協会（PAFMIL）によれば、フィリピンでは、コメが主食であり、その状況に変わりはないが、若い世代におけるパン及び麺類（特にインスタント麺）の消費が増加傾向とのこと。

#### (2) 輸入動向

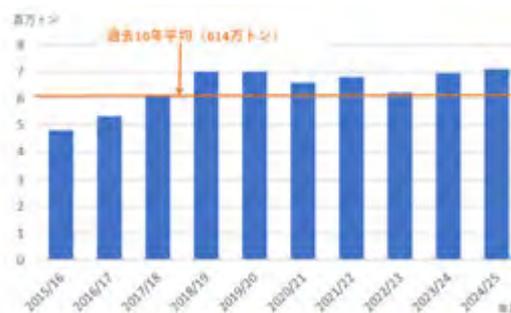
USDAによれば、製粉用、飼料用小麦ともに輸入量は増加傾向にあり、2024/25年度の小麦の輸入量は、720万トンと前年度（692万トン）と比べ4.1%増、過去10年平均（620万トン）と比べても16.1%増と、2018/19年度（757万トン）に次ぐ輸入量となる見込み（図2）。

フィリピンは、世界第7位の小麦輸入国であり（図3）、世界の小麦輸入量に占めるフィリピンの割合は3.5%となっている。

#### (3) 国別輸入動向

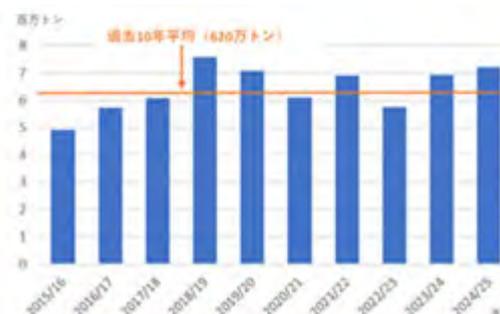
USDAによれば、2023/24年度のフィリピンの国別小麦輸入量は、1位米国、2位豪州、3位ブラジルの順となっており、米国が270.1万トンと、前年度（197.0万トン）と比べ37.1%増、豪州が259.2万トンと前年度（306.7万トン）と比

図1 フィリピンの小麦消費量の推移



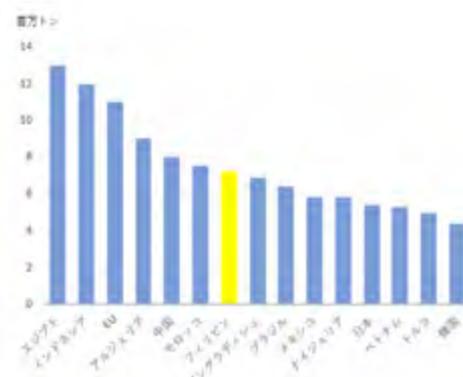
出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図2 フィリピンの小麦輸入量の推移



出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図3 小麦の国別輸入量上位  
(2024/25年度、上位15カ国)



出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

べ15.5%減、ブラジルが110.5万トンと前年度の5トンから大きく増加している。これは、主要輸入先である豪州が干ばつにより減産となり、豪州からの輸出が減少した一方で、ブラジルが東南アジアへ向けに飼料用小麦の輸出国として台頭してきたことによる（図4）。

#### （4）製粉用小麦の輸入量の推移

フィリピン統計局によれば、2024年1月～12月の製粉用小麦の輸入量は、334.5万トンと、前年（298.8万トン）に比べ11.9%増となった。同期間の輸入先国別には、米国が276.7万トンと82.7%を占め、次いでカナダ39.7万トンで11.9%、豪州が12.7万トンで3.8%と続いている（表1）。

製粉用小麦の輸入量は、2015年から2024年の10年間で255.9万トンから334.5万トンと30.7%増加した。2020年に329.9万トンとピークに達したが、2024年はそのピークを上回った。

業界情報によれば、フィリピンで輸入されている製粉用小麦の銘柄・等級は、米国産ダーク・ノーザン・スプリング（DNS）、米国産ソフト・ホワイト（SW）、カナダ産ウェスタン・レッド・スプリング（CW）のいずれも2等が主であるとのこと。

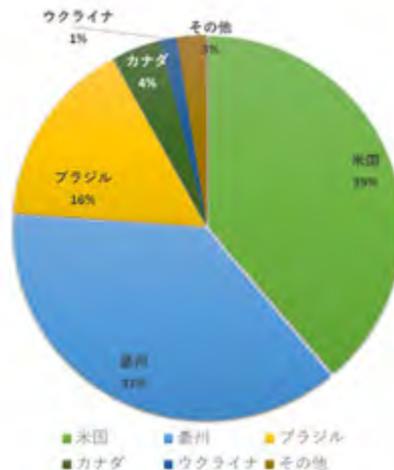
#### （5）飼料用小麦の輸入量の推移

フィリピン統計局によれば、2024年1月～12月の飼料用小麦の輸入量は、342.0万トンと、前年（256.4万トン）に比べ33.4%増となった。

同期間の輸入先国別には、豪州が230.5万トンと67.4%を占め、次いでブラジル101.7万トンで29.7%、ウクライナが7.9万トンで2.3%と続いている（表2）。

飼料用小麦の輸入量は、2015年から2024年の10年間で197.6万トンから342.0万トンと73.1%増加した。2018年に394.5万トン、2019年に394.7万トンと400万トン近くまで輸入量が伸びたが、2020年以降は300万トン前後で推移している。

図4 フィリピンの主要小麦輸入先国シェア (2023/2024)



出典：USDA「GAIN Global Agricultural Information Network (2024.10.3)」をもとに農林水産省で作成

表1 フィリピンの製粉用小麦輸入先国

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
米国	299.5 91.9	米国	237.1 77.9	米国	210.4 70.4	米国	276.7 82.7
カナダ	7.8 2.4	豪州	34.4 11.3	カナダ	46.6 15.6	カナダ	39.7 11.9
豪州	3.7 1.1	カナダ	31.3 10.3	豪州	32.9 11.0	豪州	12.7 3.8
その他	15.1 4.6	その他	1.7 0.6	その他	8.9 3.0	その他	5.3 1.6
計	326.0 100.0	計	304.5 100.0	計	298.8 100.0	計	334.5 100.0

出典：フィリピン統計局 Open Stat Data base

表2 フィリピンの飼料用小麦輸入先国

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
豪州	187.8 67.8	豪州	289.9 91.3	豪州	248.7 97.0	豪州	230.5 67.4
インド	29.2 10.5	インド	27.1 8.5	ブラジル	7.2 2.8	ブラジル	101.7 29.7
ウクライナ	27.0 9.8	ウクライナ	0.4 0.1	ウクライナ	0.5 0.2	ウクライナ	7.9 2.3
フランス	11.9 4.3	-	-	インド	0.0 0.0	ルーマニア	1.6 0.5
その他	21.1 7.6	その他	0.0 0.0	その他	0.0 0.0	その他	0.3 0.1
計	277.0 100.0	計	317.4 100.0	計	256.4 100.0	計	342.0 100.0

出典：フィリピン統計局 Open Stat Data base

## 2 コメの輸入・生産動向

### (1) 消費動向

USDA によれば、2024/25 年度のコメの消費量は 1,720 万トンと前年度 (1,660 万トン) と比べ 3.6% 増、過去 10 年平均 (1,444 万トン) と比べ 19.1% 増となる見込み (図 5)。

フィリピンでは、「コメはいのち (Rice is Life)」と言われるように、コメは主食としての地位を保ち、人口増加等に伴い消費量が増加している。

国連食糧農業機関 (FAO) の Food Balance Sheet によれば、フィリピンの一人当たりのコメ年間消費量は、108 kg/人 (2002 年) から 194 kg/人 (2022 年) に増加している。

一方、コメ生産量は過去 10 年平均で、1,204 万トンと増加する消費量との差が広がっている。2024/25 年では 520 万トンの差となり (図 6)、この差を補うため輸入量が増加している。

### (2) 輸入動向

フィリピンは世界第 1 位のコメ輸入国である (図 7)。

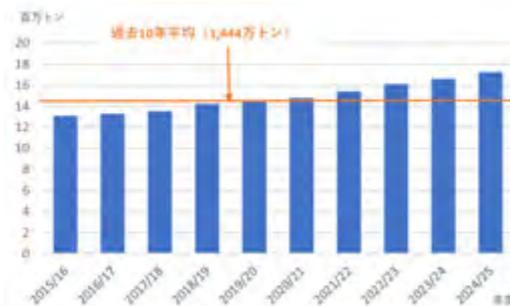
フィリピン統計局によれば、2024 年 1 月～12 月の輸入量は、477 万トンと、前年 (361.1 万トン) に比べ 32.1% 増。同期間の輸入先国別には、ベトナム 355.0 万トンと 74.4% を占め、タイ 64.2 万トンで 13.5%、パキスタン 30.9 万トンで 6.5% の順 (表 3)。

### (3) 生産動向

フィリピンは世界第 7 位のコメ生産国であり、世界のコメ生産量に占めるフィリピンの割合は 2.3% となっている。

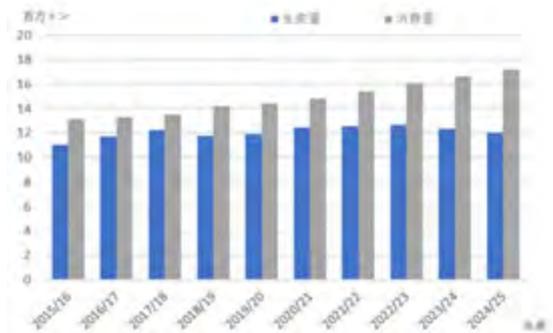
USDA によれば、2024/25 年度のコメの生産量は、2024 年 7 月に上陸した台風「ガエミ」と 9 月に上陸した台風「ヤギ」による稲作への被害が影響し、1,200 万トンと前年度 (1,233 万トン) と比べ 2.6% 減となる見込み (図 8)。

図 5 フィリピンのコメの消費量の推移



出典: USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

図 6 フィリピンのコメ生産量と消費量の推移比較



出典: USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

図 7 コメの国別輸入量 (2024/25 年度、上位 5 カ国)



出典: USDA 「PS&D」 (2025.2) をもとに農林水産省で作成

表 3 フィリピンのコメ輸入先国

2021年 (2021年1月～12月)		2022年 (2022年1月～12月)		2023年 (2023年1月～12月)		2024年 (2024年1月～12月)	
国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア	国名	輸入量 シェア
ベトナム	237.4 84.7	ベトナム	318.8 82.3	ベトナム	296.9 82.2	ベトナム	355.0 74.4
ミャンマー	20.2 7.2	ミャンマー	23.4 6.1	タイ	34.2 9.5	タイ	64.2 13.5
タイ	14.2 5.1	パキスタン	20.9 5.4	ミャンマー	15.6 4.3	パキスタン	30.9 6.5
中国	3.1 1.1	タイ	19.7 5.1	パキスタン	10.0 2.8	ミャンマー	20.9 4.4
パキスタン	2.5 0.9	インド	2.3 0.6	インド	2.7 0.8	インド	3.3 0.7
インド	1.5 0.5	中国	1.2 0.3	中国	1.1 0.3	中国	2.1 0.4
その他	1.4 0.5	その他	0.8 0.2	その他	0.6 0.2	その他	0.6 0.1
計	280.4 100.0	計	387.3 100.0	計	361.1 100.0	計	477.0 100.0

出典: フィリピン統計局 Open Stat Data base

7月の台風「ガエミ」は、ルソン島、ビサヤ諸島、ミンダナオ島のフィリピン全土に影響を及ぼし、コメの作付地 67,432 ヘクタールが壊滅し、18,629 トンの損失をもたらした。

9月の台風「ヤギ」は、ビコール地方を直撃し、ルソン島とビサヤ諸島の他地域にも影響を与えた。34,935 ヘクタールの稲作に被害を与え、48,646 トンの損失となった。フィリピンの台風シーズンのピークは7月から10月で、台風の70%近くがこの時期に発生する。そのため台風被害により、毎年第3四半期には生産量が減少する傾向にある。フィリピンのコメ生産は、雨季作（3月作付け9月収穫）と、乾季作（9月作付け1月収穫）の二期作で一年を通し栽培が可能である。

### 3 今後の見通し

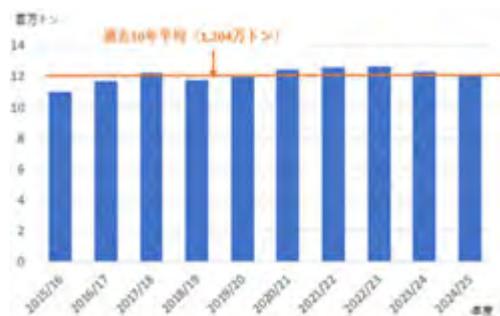
#### (1) 2024/25年度の小麦の輸入見通しと日本との競合可能性

USDAによれば、2024/25年度の輸入増の主な要因は、製粉用小麦についてはパン及びパスタの需要増に伴う製粉用小麦の需要の増加、飼料用小麦については国内のとうもろこし主要産地において害虫被害により飼料用とうもろこしの生産量が減少することによる代替需要が見込まれることが挙げられる。

フィリピンにおける2024年の飼料用小麦の輸入関税率については、大統領指令（EO）第62号により、0～7%と、とうもろこしの輸入関税率（5～15%）に比べ低い。フィリピンでは、近年とうもろこしと小麦の市場価格が共に下落しているが、業界関係者によると2024/25年度も、飼料用小麦の関税率がとうもろこしの関税率に比べ、低く設定されていることから、事業者は飼料用小麦の輸入を優先するとのことである。

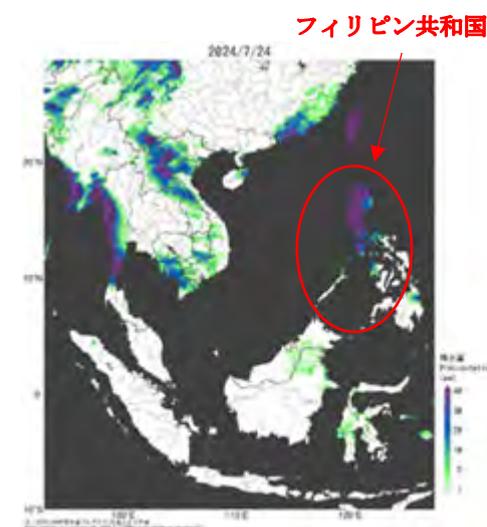
小麦輸入国である日本とフィリピンの今後の競合可能性については、業界情報によれば、フィリピンで輸入されている製粉用小麦の銘柄・等級は、米国産ダーク・ノーザン・スプリング（DNS）、米国産ソフト・ホワイト（SW）、カナダ産ウェスタン・レッド・スプリング（CW）の

図8 フィリピンのコメ生産量の推移



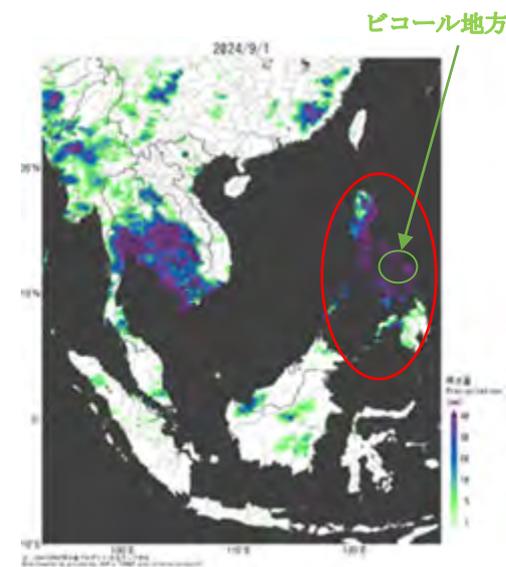
出典：USDA「PS&D」（2025.2）をもとに農林水産省で作成

図9 台風「ガエミ」上陸日の降水量 (2024. 7. 24)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図10 台風「ヤギ」上陸日の降水量 (2024. 9. 1)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

2等が主であるとのこと。

これらは、日本が輸入している銘柄と重なるものの、等級に関しては、日本が輸入している小麦は1等を輸入している場合が多いのに対し、フィリピンは2等の輸入が主になっている。そのため、競合は生じていない。ただし、現在フィリピンは2等の輸入が主体であるが、今後、経済発展とともに消費者が1等を求めていくこともありうるため、この点も考慮しておく必要がある。

また、フィリピンの小麦輸入量は、全体（製粉用、飼料用）では日本の輸入量を上回るものの、製粉用小麦と飼料用小麦の割合はおおよそ半々であり、製粉用小麦の数量は日本より少ない。ただし、今後、若年層の人口増加が見込まれるフィリピンでは、消費量が増加傾向にあるため、引き続き注視が必要である。

## (2) 2024/25年度のコメの輸入見通し

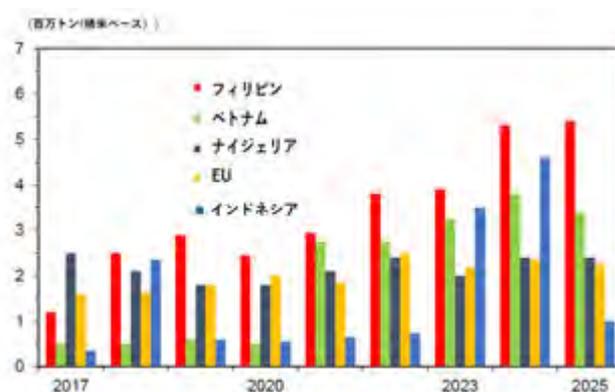
USDAによれば、2024/25年度の世界のコメ輸入では、1位フィリピン、2位ベトナムとなる見込みであり、フィリピンの輸入量は過去最高と予測されている（図12）。

フィリピン農務省は、コメの生産性向上支援のため、2019年から2024年までコメ競争力強化基金（RCEP）事業を実施し、稲作農家向けに種子、肥料、燃料の補助金を支給している。フィリピン農務省としては、コメに関し、単収の向上を図り、食料安全保障のためにも自給力向上を図っていく方針にある。

しかしながら、先に見たように、フィリピンのコメ消費量は年々増加傾向にある一方、生産量は、作付面積増の限界や度重なる台風被害の影響もあり、短期間での消費量を満たすほどのコメの生産量の増加は短期間では難しいと考えられる。

そのため、フィリピン農務省は、今後のコメ輸入継続の必要性を鑑み、2024年1月下旬に、ベトナム政府とコメ貿易協力に関する覚書を締結した。この覚書に基づき、フィリピンはベトナムから年間150万～200万トンの精米を競争力のある手頃な価格で輸入することができる。更に、フィリピン政府は2024年6月20日に、コメの関税を35%から15%に引き下げる旨公表した。このことから、2024/25年度もフィリピンは、世界第1位のコメ輸入国の地位を継続することが予測される。フィリピンのコメの輸入動向を、他のアジア諸国のコメ市場の動向と共に今後も注視していきたい。

図11 世界の主要コメ輸入国における輸入量の推移

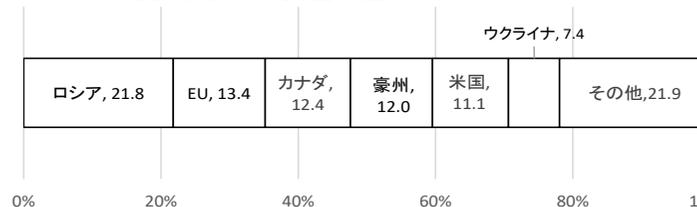


資料 USDA 「Rice Outlook」(2025. 2. 13)より

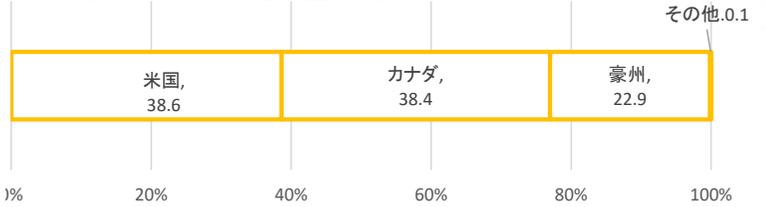
# 資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



2024/25年度の世界の小麦輸出量(209.0百万トン) (単位:%)



2023年の日本の小麦輸入量(5.0百万トン) (単位:%)



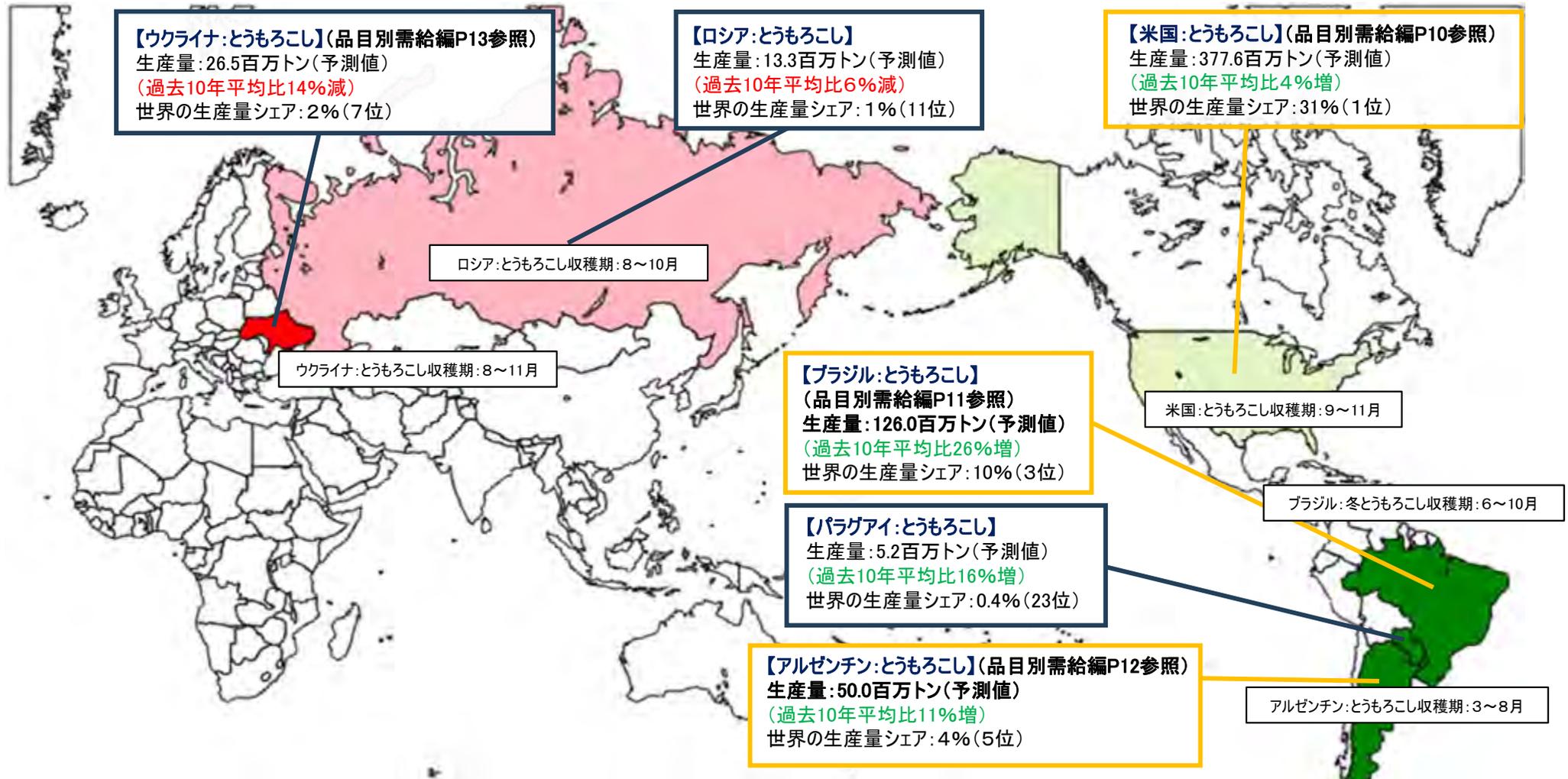
## 生産量増減



- 2023年度の日本の小麦輸入量は510万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(631万トン、うち食用は494万トン)の80.9%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は238kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の10.8%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

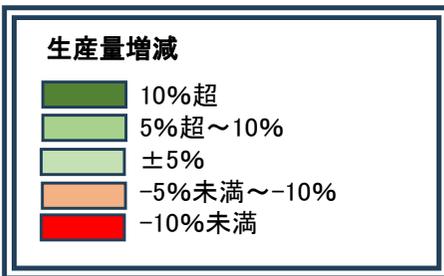
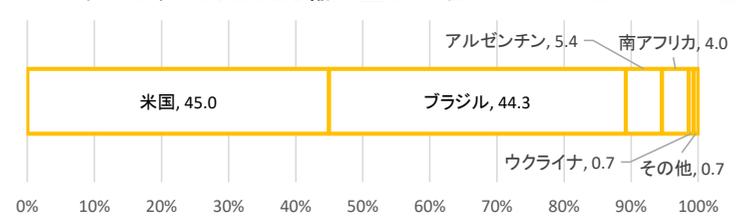
# 資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



2024/25年度の世界のとうもろこし輸出量(189.2百万トン) (単位:%)



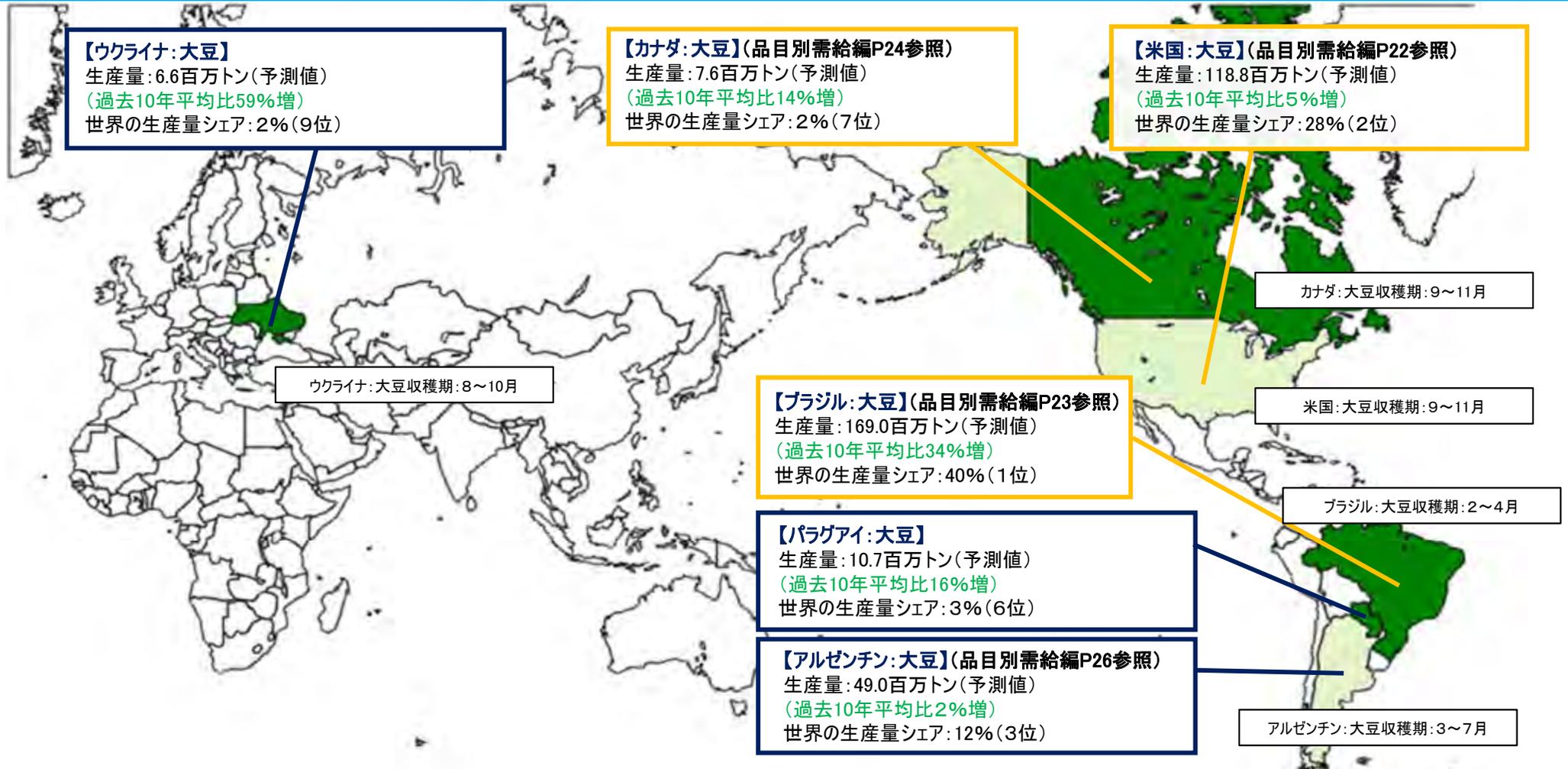
2023年の日本のとうもろこし輸入量(14.9百万トン) (単位:%)



○ 2023年度の日本のとうもろこし輸入量は1,499万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,486万トン、うち飼料用は1,159万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

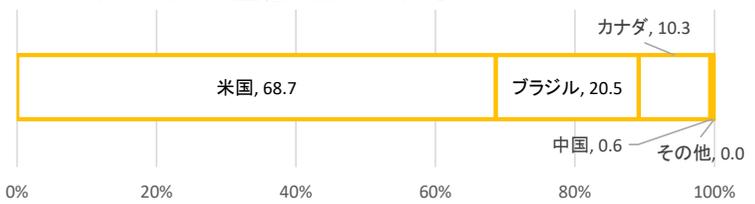
# 資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(2月版)



2024/25年度の世界の大豆輸出力(182.0百万トン) (単位:%)



2023年の日本の大豆輸入量(3.16百万トン) (単位:%)



**生産量増減**



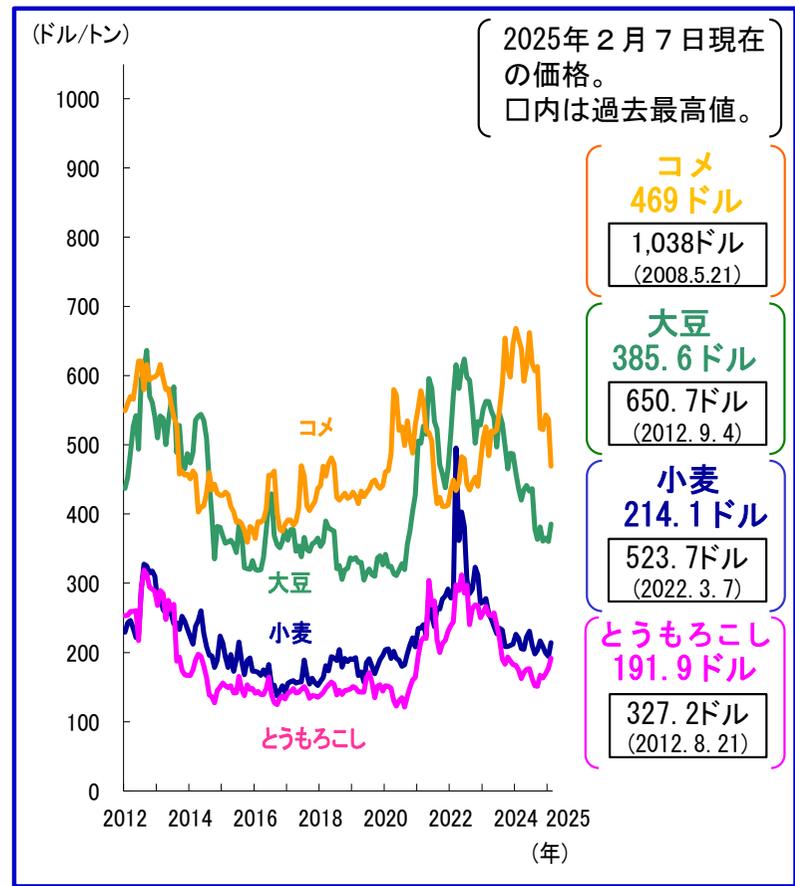
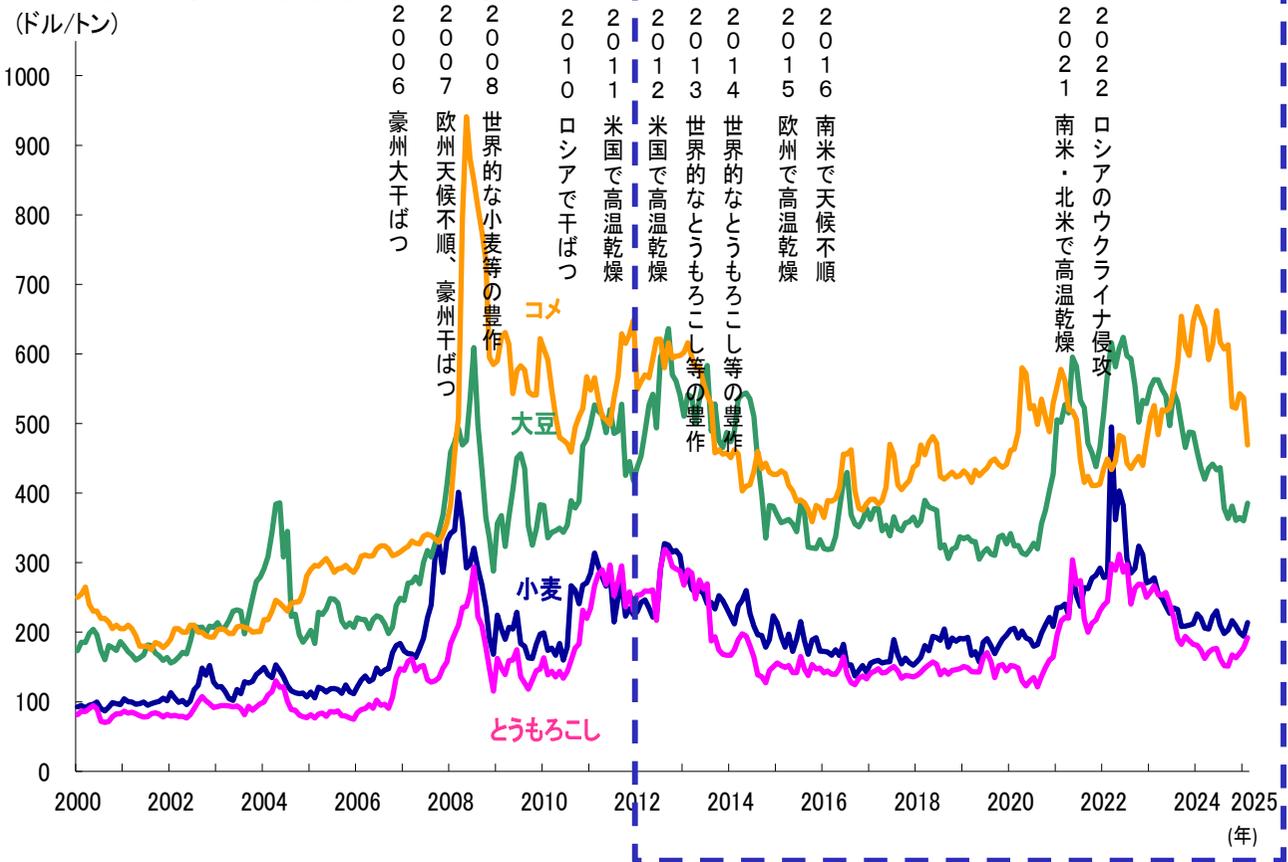
○ 2023年度の日本の大豆輸入量は307万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(356万トン、うち大豆油などの加工用は255万トン、食用は87万トン)の86.2%を占める。  
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は55kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の2.5%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.2)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

# 資料 1-4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの一部輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

## □ 穀物等の国際価格の動向

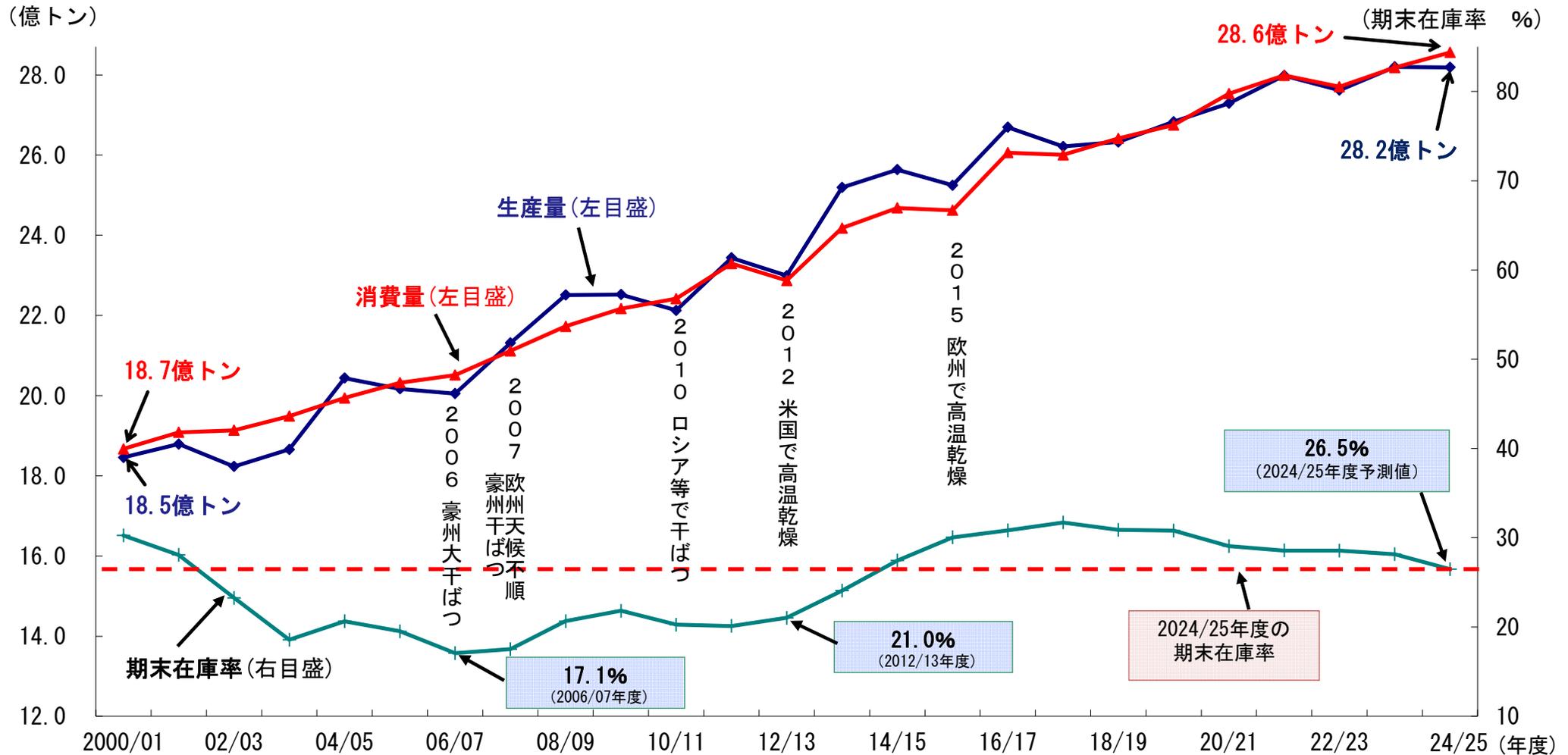


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。  
 注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

### □ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

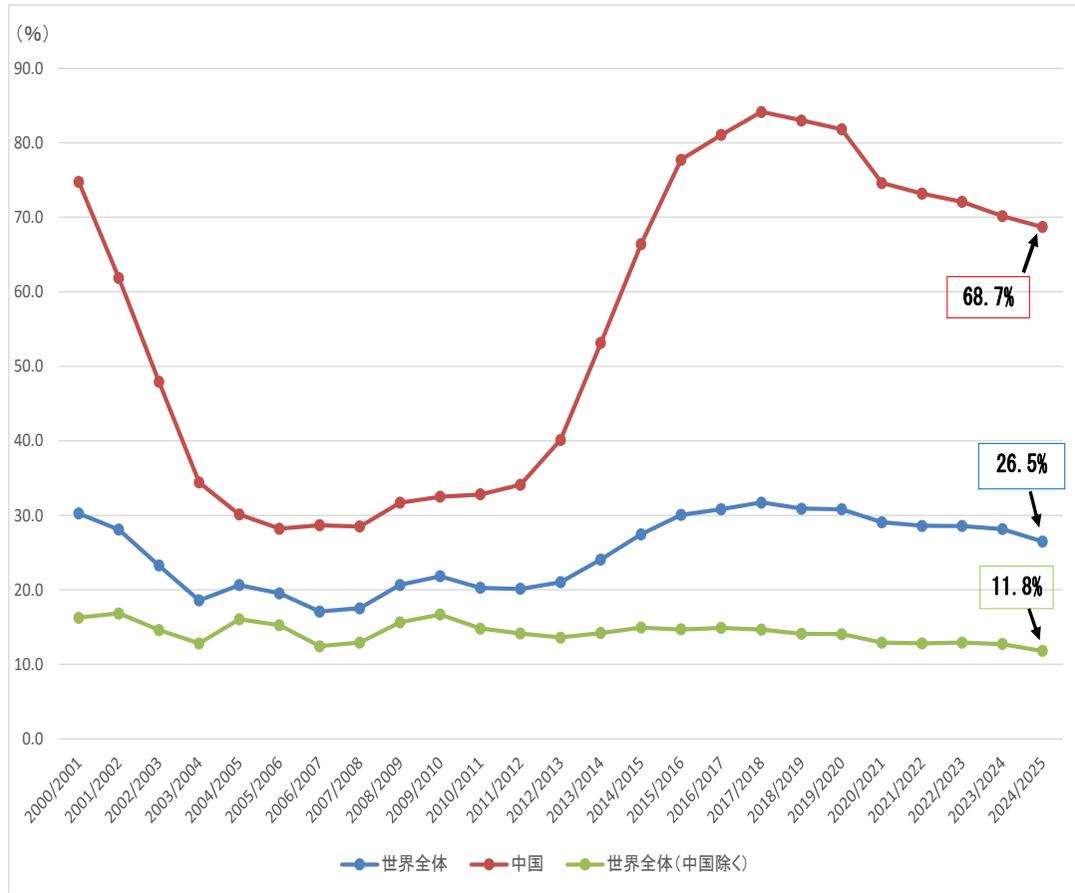


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2025)、「PS&D」

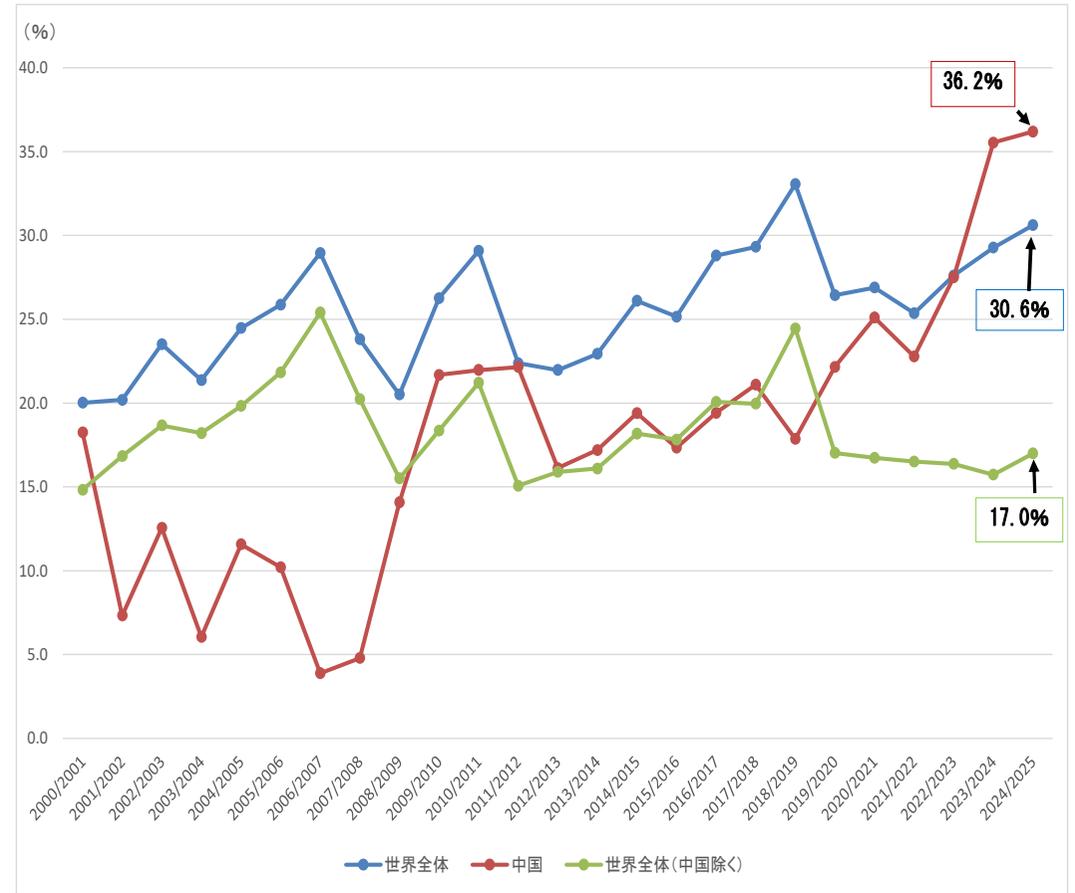
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 11, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

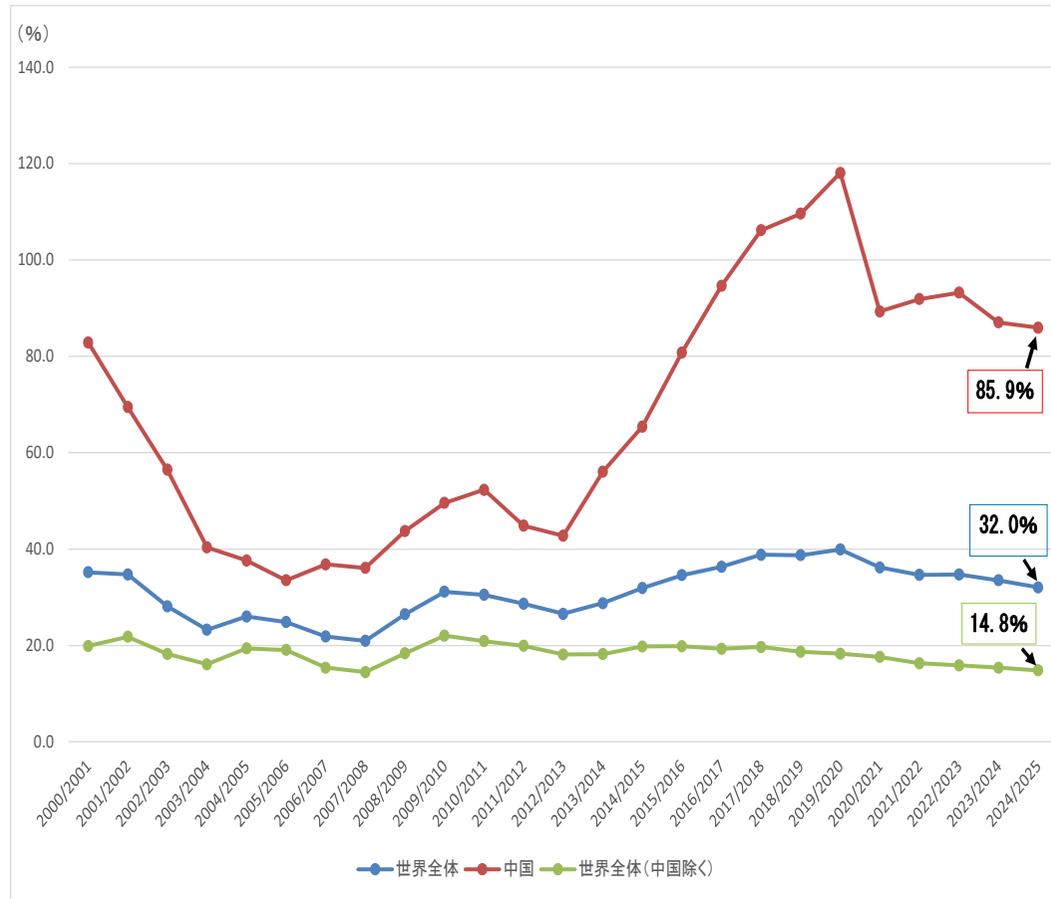
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

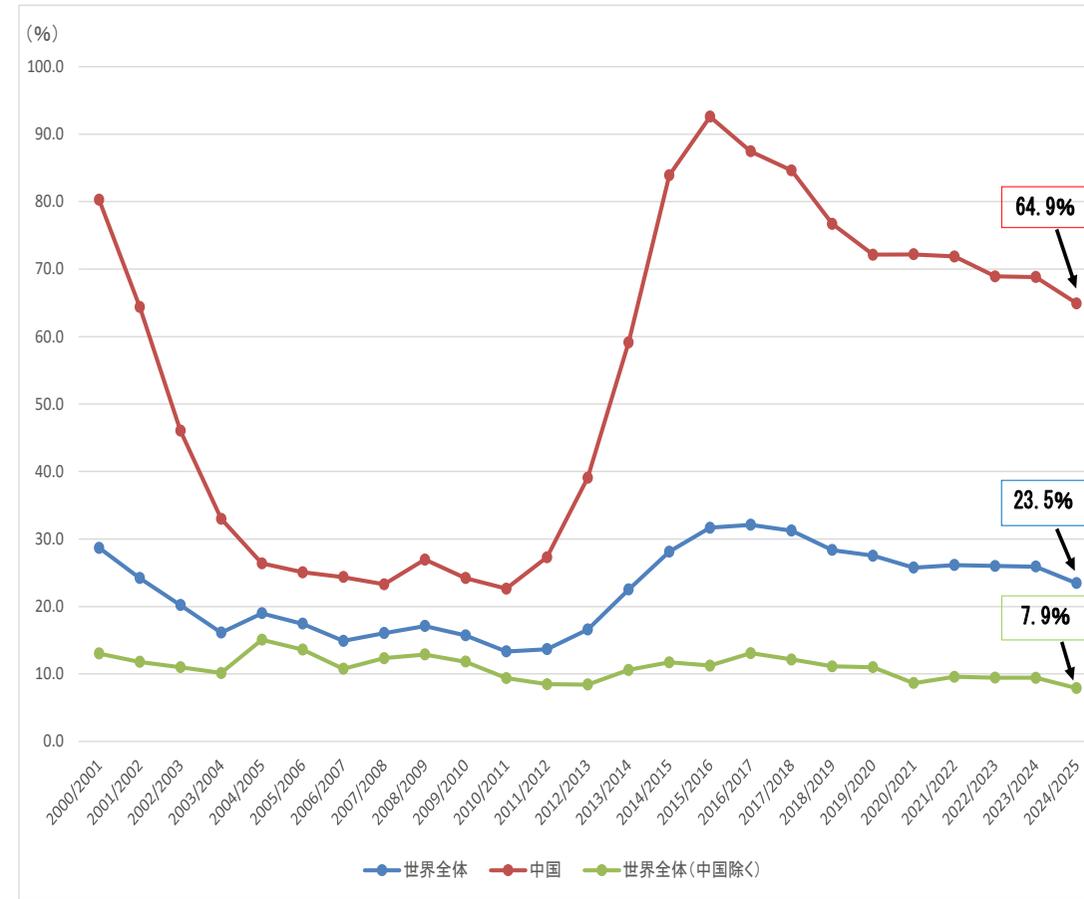
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

# 資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

## ○ 小麦の期末在庫率の推移



## ○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(February 11, 2025)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

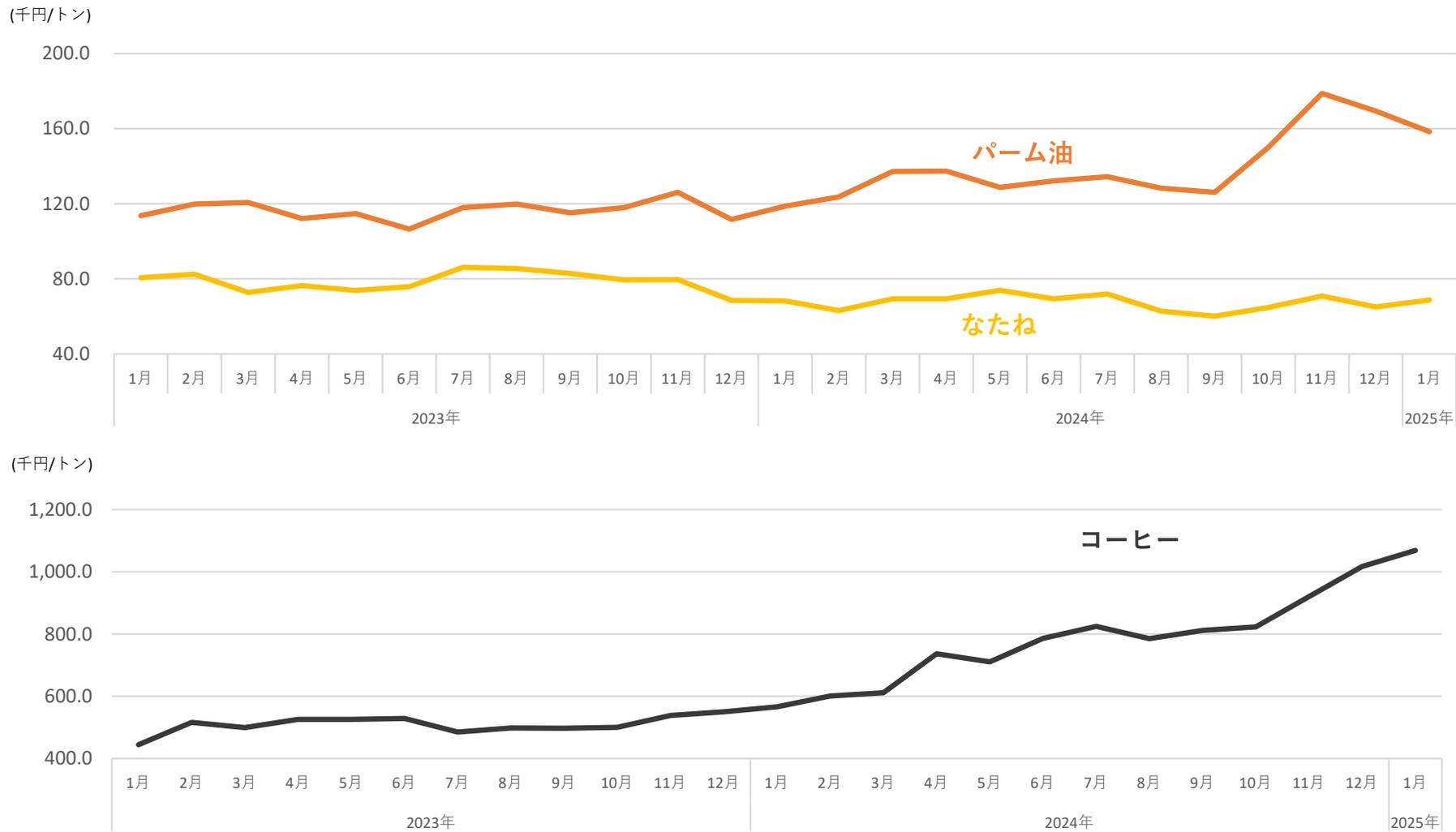
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

# 資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇している。
- なたねについては、安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降上昇している。



2025年2月21日現在  
□内は2023年1月以降の最高値。

パーム油  
158.4千円/トン  
178.8千円/トン  
(2024.11)

なたね  
68.7千円/トン  
86.2千円/トン  
(2023.7)

コーヒー  
1068.8千円/トン  
1068.8千円/トン  
(2025.1)

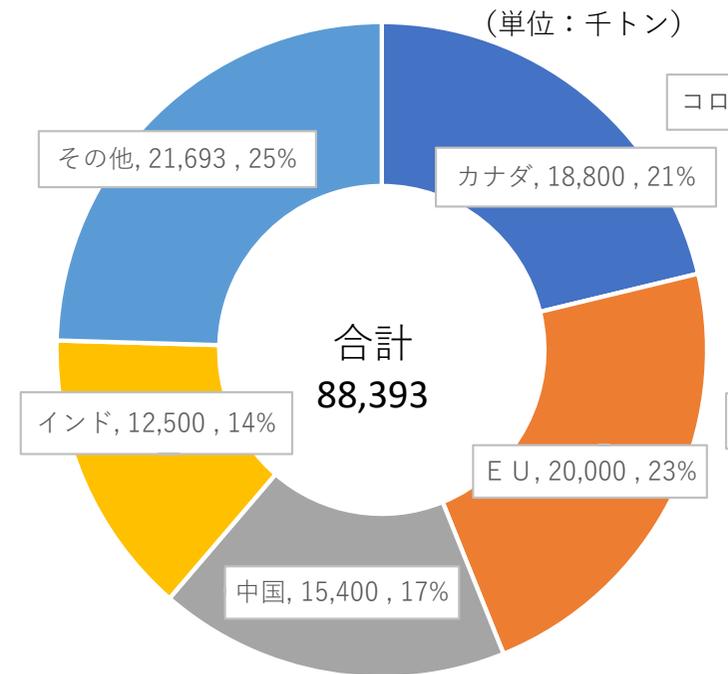
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

# 資料4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

## ○主要生産国の生産状況

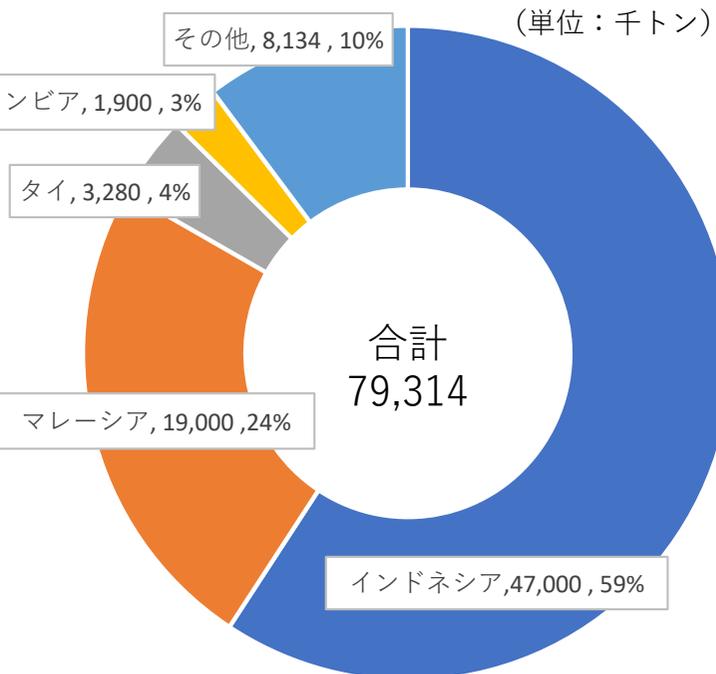
なたね生産量（2023/24）

（単位：千トン）



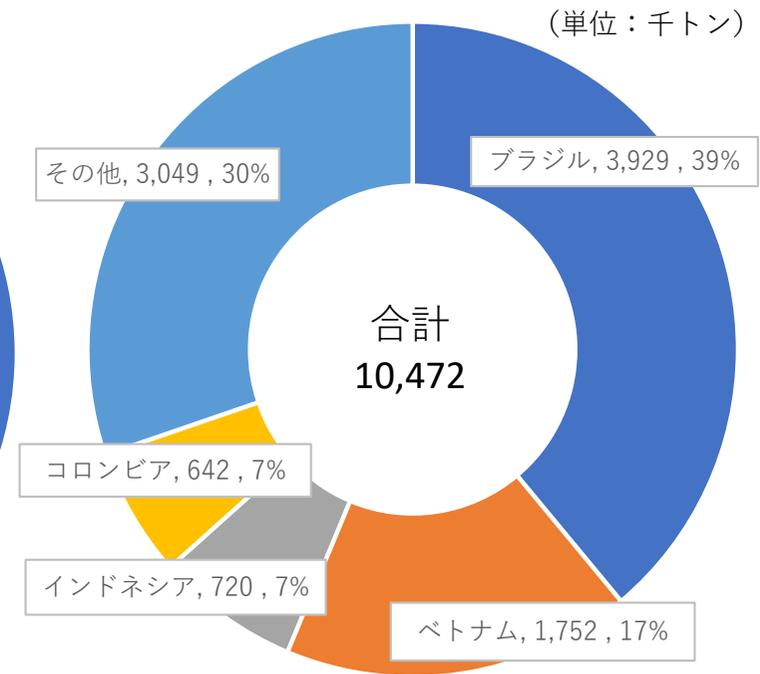
パーム油生産量（2023/24）

（単位：千トン）



コーヒー生産量（2022/23）

（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2024年6月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）  
2024年6月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料  
2024年6月時点

## ○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%
オーストラリア	983	48.6%
その他	0	0.0%
<b>合計</b>	<b>2,022</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	574	85.6%
インドネシア	96	14.4%
その他	0	0.1%
<b>合計</b>	<b>671</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	124	35.0%
ベトナム	99	27.9%
コロンビア	34	9.6%
その他	98	27.6%
<b>合計</b>	<b>356</b>	<b>100.0%</b>

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

# 資料4-3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

## ①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年																				
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月									
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7																				
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7																				
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7																				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

## ②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年																					
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月										
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4																					
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5																					
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4																					

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出



# 資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は114.5～153.9(前年同月比で-3.5%～5.1%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)  
(令和6年8月～令和7年1月)

【参考】  
食品価格動向調査(農林水産省)  
(令和6年8月～令和7年2月)

品目	R2	R3	R4	R5	R6					R7	上昇率 (前年 同月比)	品目	R2	R3	R4	R5	R6					R7		上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月			平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月		
食パン	100.0	99.2	110.3	118.7	122.6	122.3	121.6	121.5	121.9	124.6	2.1%	食パン	100.0	98.6	107.8	114.5	118.6	118.9	118.2	117.4	118.2	122.5	124.0	1.2%	5.6%
即席めん	100.0	100.1	107.6	119.7	124.3	120.2	118.4	122.0	120.1	118.0	-3.5%	即席めん	100.0	99.2	105.6	117.5	120.4	119.1	115.5	118.5	117.3	115.5	116.7	1.0%	-3.6%
豆腐	100.0	101.3	105.3	114.6	117.9	118.8	119.3	119.7	119.1	119.4	2.1%	豆腐	100.0	100.6	103.7	113.0	115.9	116.7	118.5	119.3	118.0	118.5	118.0	-0.4%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	106.9	144.4	160.2	148.1	144.3	146.9	149.8	149.9	149.0	-2.5%	食用油 (キャノーラ油)	100.0	104.1	140.7	159.4	145.1	143.5	144.5	142.9	140.0	140.3	139.7	-0.4%	-7.7%
みそ	100.0	99.3	101.3	108.1	113.7	114.8	115.3	114.4	114.0	114.5	2.7%	みそ	100.0	99.2	100.1	105.9	109.8	110.2	110.0	110.6	108.8	109.8	110.0	0.2%	-0.4%
マヨネーズ	100.0	105.6	125.6	149.5	151.8	153.3	152.7	153.1	153.1	153.9	0.3%	マヨネーズ	100.0	102.2	117.7	139.8	140.6	141.3	140.6	138.6	140.6	140.6	139.9	-0.5%	-3.1%
チーズ	100.0	98.7	107.5	131.1	135.4	133.4	134.6	133.4	128.2	132.9	0.0%	チーズ	100.0	98.1	105.7	126.5	129.3	128.8	128.8	128.3	122.3	127.8	126.3	-1.2%	-1.9%
バター	100.0	99.9	99.2	108.6	120.1	120.0	120.1	120.1	119.5	120.0	0.9%	バター	100.0	99.8	99.1	108.0	119.7	118.8	119.4	119.7	119.2	120.1	119.4	-0.6%	0.8%
生鮮食品を 除く食料	100.0	100.2	104.1	112.6	117.1	117.8	119.2	119.9	120.1	121.0	5.1%														

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。  
注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。  
注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。  
資料: 総務省消費者物価指数

## 資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年3月号（2月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

### ◆牛肉

（米国）24年11月の牛肉輸出量は前年同月比10.5%増、韓国向けがけん引

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003622.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003622.html)

（EU）高騰する枝肉価格の影響から、牛肉生産量は増加

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003623.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003623.html)

（豪州）24年の牛肉輸出量は過去最高記録を更新、25年も堅調な輸出量を見込む

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003624.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003624.html)

（NZ）24/25年度も米国向け牛肉輸出が堅調

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003625.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003625.html)

### ◆豚肉

（カナダ）24年の豚肉生産量は前年比1.0%減、輸出量は増加

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003626.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003626.html)

（チリ）24年1～11月の豚肉輸出量、中国向けが大幅減も全体ではわずかな減少

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003627.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003627.html)

## 資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

### ◆牛乳・乳製品

（米国）24年12月のチーズ卸売価格、国内外の需要増から前年同月比18.8%高

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003628.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003628.html)

（EU）好調な乳製品需要を要因に生産者乳価は高水準を維持

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003629.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003629.html)

（NZ）生乳生産量6カ月連続で前年同月を上回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003630.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003630.html)

（中国）24年の生乳生産量は7年ぶりに前年を下回る

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003631.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003631.html)

### ◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）生産減・消費増などから期末在庫はかなりの程度減少

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003633.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003633.html)

（世界：大豆）米国の単収減から大豆生産量は下方修正も、期末在庫は高水準を維持

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003634.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003634.html)

（米国）米国は総供給量の減少により期末在庫はかなり大きく減少

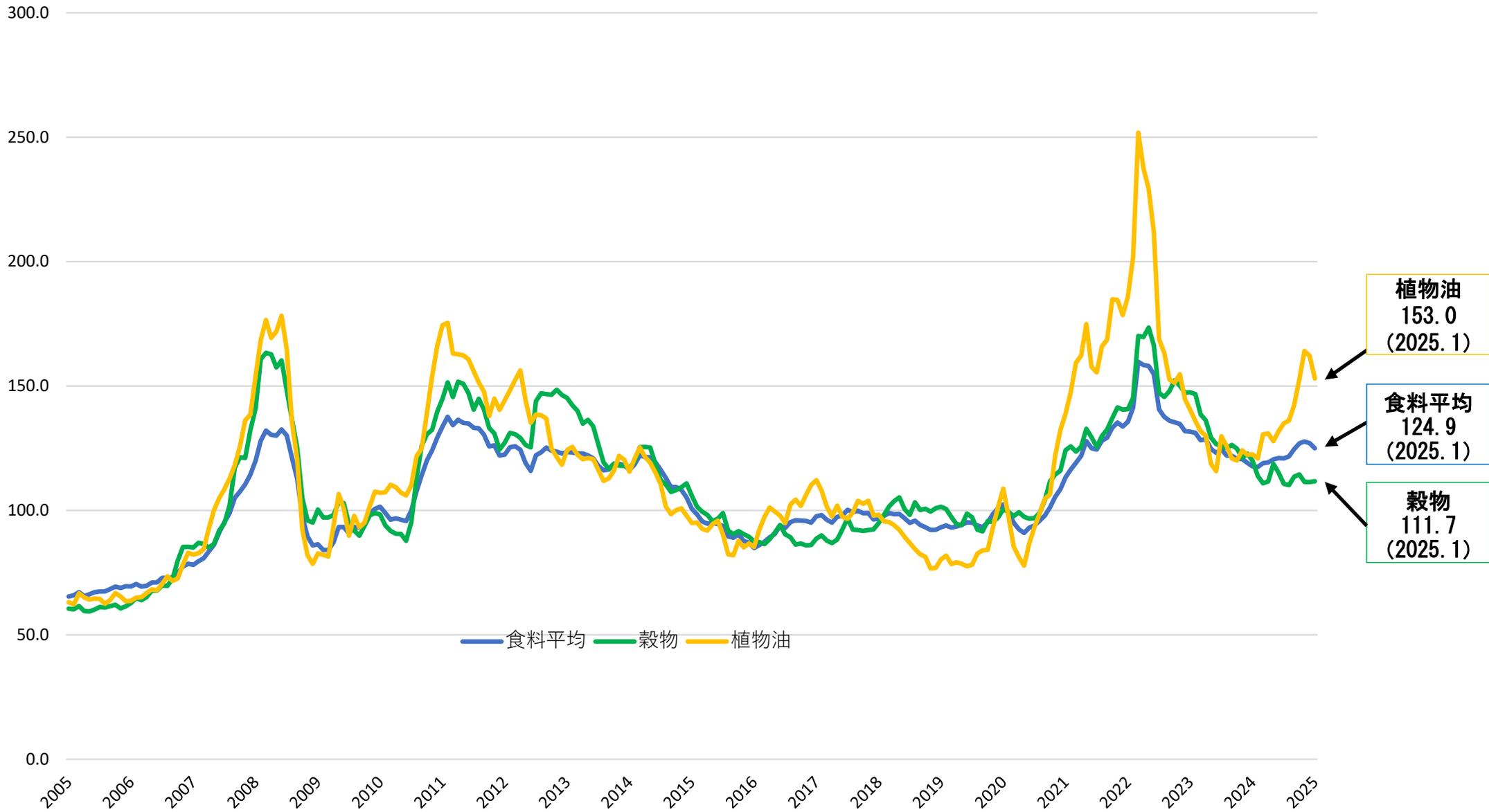
[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003635.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003635.html)

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_003636.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003636.html)

# 資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

## タイの食事情（コメ料理）について

### 1 はじめに

タイ料理は世界でもよく知られる料理のひとつであり、パッタイ、トムヤムクン、ガパオライスなど、日本人にもよく知られています。今回はタイのコメ輸出の動向やタイへの日本産米輸出の可能性を紹介しましたが、今回は引き続きタイの人々の主食であるコメに焦点を当て、タイの様々なコメ料理を紹介します。

### 2 タイの食事情

（タイ料理の名称）

タイ語で「コメ」は「カオ」と呼ばれます。コメを使った料理として、例えば、タイ料理で有名なカオマンガイ（鶏肉を茹で、そのスープで炊いたご飯と一緒に提供される料理）は、タイ語で「カオ（ご飯）」「マン（油）」「ガイ（鶏肉）」を意味します。また、チャーハンは、タイ語でカオパッドと呼ばれ、「カオ（ご飯）」「パッド（炒める）」を意味します。

なお、コメから話は逸れますが、トムヤムクンは、タイ語で「トム（煮る）」「ヤム（混ぜる）」「クン（エビ）」を意味し、エビを煮て混ぜたスープということが分かります。このように、タイ料理の名称は、実際に提供される料理を連想できることが多いです。

（コメを使った幅広い料理）

タイにおいて、コメはお粥や麺、デザートなど、幅広い料理で使われており、日本以上に多様性を感じます。例えば、タイの屋台で麺類を注文する際、多くの場合、最初に麺の種類を選ぶことから始まります。種類としては、小麦由来の中華麺のほか、米粉由来の極細麺、中細麺、幅広麺、皮麺など、コメ由来の多様な麺が選べ、コメの消費拡大にも寄与していることが分かるとともに、米粉のマーケットが非常に大きいことがうかがえます。

デザートでは、ココナッツミルクをかけたもち米とマンゴーがセットになったカオニャオ・マムアン（「カオニャオ（もち米）」「マムアン（マンゴー）」を意味します。）は、多くの日本人が好きになる味です。

もち米については、竹製の籠に入れられて提供され、料理と一緒に食べることも多く、見た目も美しく、おいしく食べることができます。

タイのこうした多様なコメの食べ方は、コメの消費拡大を進める日本にとって学ぶことも多いのかもしれませんが。

### 3 終わりに

毎年5月、タイで農耕祭が開催され官公庁はお休みになります。この日は1年間のコメの豊作を願い、王宮周辺で様々な儀式が開催されます。タイの人々にとって、いかにコメが歴史的に重要であるかを感じることができます。

文責：金永 忠之（在タイ日本国大使館 一等書記官）

(写真：コメを使った料理)



写真1 クイッティアオ

クイッティアオと呼ばれる麺料理であり、麺やスープの種類を選択して注文する。

写真は、センレックと呼ばれる中細麺であり、最も一般的な麺。スープは豚骨や豚の血がベースのスープ。臭みなどはなく飲みやすい。



写真2 クイチャップ

三角形の生地を茹でるとくるくる丸まったマカロニのような形の米粉麺でクイチャップと呼ばれる。

(タイは、歴史的に中国の食文化の影響も強く受けており、タイと中国の要素が組み合わさったような料理も多い。)



写真3 カオニャオ・マムアン

カオニャオ・マムアン（マンゴーライス）は、伝統的なデザート。もち米にココナッツミルクを混ぜ、マンゴーと一緒に食べる。コース料理の最後に出てくることが多いが、出てくる頃には、既に満腹になっていることも多く、これを満腹で食べるのはヘビー。

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います